ホームシックシンドローム

住ノ江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ホームシックシンドローム

【Ｎコード】
Ｎ７６３３Ｌ

【作者名】
住ノ江

【あらすじ】
田舎生まれ田舎育ちの旬太郎は大学進学を期に上京することになった。
大学２回生になってもホームシックが治らない旬太郎とは対照的にキャンパスライフをエンジョイしている同居人の晴輝。
そんな二人のだるだるライフ、そんなゆるい感じのお話です（予定）
ゆるい感じですがＢＬ風味ですので、閲覧の際はご注意ください。

田舎に帰りたい　#１（前書き）

見切り発車のため予告なく書きなおす可能性がありますのでご了承ください。
修正した場合には活動報告にてお知らせいたします。

田舎に帰りたい　#1

地元を離れて早一年。

俺こと青木旬太郎はピチピチの１９歳、工学部に通う大学二回生である。

大学進学を期に、住み慣れた地元を離れてこの街に住むことになってから一年が経った。

山に囲まれ田んぼ溢れる田舎に生まれ育った俺はまごうことなき田舎者である。

生まれてからほとんど地元から出たことがなかった。だから都会という未知の世界に過大な期待を寄せていた。

夢にまでみた都会。きらびやかな店、華やかな人びと、そして素敵なお姉さん。

電車だって一時間に一本ではないし、コンビニに行くのに車はいらない。

そんな大都会。

しかし憧れは憧れのままがよかったのかもしれない、と浮き足だっていた当時の自分に言ってやりたい。

胸に期待を抱いて上京した俺を待ち受けていたのは生易しいものじゃなかったからだ。

――――――――――――

バイトを終え帰宅するとどっと疲れが襲ってくる。
時計は夜の１０時を示していた。
ぎしぎしと軋む身体をソファに投げ出せば、自然と溜め息が出る。

大学二回生の俺の日常はこうだ。

朝。
満員電車を乗り継ぎ学校へ行き、あくびを押し殺しながら抑揚のない退屈な講義を受ける。
大学なんて適度にサボって出席カードは代返で、なんてイメージがあったのだがそれは甘かった。厳しいダブルチェックと毎回山のように出る課題のせいで嫌でも出ざるを得ない。
まぁ俺はサボりとかが苦手な性分なのでどうせ出ていたと思うけど。

講義後はサークルで汗を流す暇もなくバイトへ直行する。
というよりサークルは1年次で辞めた。

当然のごとくサークルに対しても大きな期待を抱いていたが、新入生への洗礼は酷いものだった。
ノリで行ってみたテニスサークルの新入生歓迎会で、何故かイッキ飲みを強要され飲まされひっくり返って以来、足が遠のいてしまったのだ。

大体鉄腕アルバイターの俺はサークルで遊ぶ余裕なんてないんだ。
と自分に言い聞かせた。所属している同好会はあるがまあ、あれはスルーしておくことにする。なんとなく、関わっていることにはしたくない。

とにもかくにも、このとき俺は既に思い描いていた理想のキャンパスライフと現実とのギャップを感じ始めていたのだった。

あんなに憧れた土地にいざ住んでみれば、空気悪いわ人は多いわで悪いところばかり目がつく。
満員電車なんぞに乗っていると、まるで自分の人権が無視されたような気になってくる。
この一年でだいぶ人間的に荒んだ気さえする。それは大げさだけど。
不満を挙げればキリがないが、一年もすれば慣れるだろうと思っていた。
実際一年経ってみれば、慣れたというより諦めがついた。

――憧れの大都会は、楽園ではなかったと。

しかし、俺も現状を嘆いてウジウジしているだけの小さな男じゃない。
自分も周りに合わせて変わろうとそれなりに努力だってした。

いわゆる大学デビューというやつだ。

髪も染めたし（びっくりするほど家族から不評だった）、メガネは普通のフレームからデザインフレームに変えた。
服は相変わらず“しもむら”ブランドであったがそこは致し方ない。
意外とバレないもんだ（…と思うようにしている）
大体地元には丸居だか四角居だか忘れたけどそんなおしゃれな店はない。

あるのはジャストのみ。ジャストへ行けば何でもそろうと言っても過言じゃない。
スーパーだとか言ったやつは表へ出ろ今すぐに。
ジャストさんの駐車場でかさハンパないんだぞ（ここへ来るまではでかいということすら知らなかったが）

まあなんとか外面は変えることが出来たが、内面はなかなかそうもいかなかった。
元々人付き合いが苦手で上っ面な人間関係ばかり築いていたが、それはやはり何処へ行っても変わらないらしい。
まず大学生特有？のあの「ウエ～イ」という妙なテンションが苦手だった。よくわからん。

大学でも結局またいつもと変わらずヘラヘラ愛想笑い。
当たり障りのない人間関係を築いて、なんとなく過ごす日々が続く。
やっぱり人間急には変われないもんだ、と悟ってみたりする。

そんなこんなで入学から一年経った今でも俺はホームシックだ。
やっぱり地元が一番落ち着くんだ。
家へ帰れば温かく出迎えてくれる家族がいる。お袋の飯はうまいし、爺ちゃん婆ちゃんは俺の土産話を楽しみにしてくれてる。
それに気の許せる友人達だっている。

親父は中学生の頃他界したが、お袋も爺ちゃんも婆ちゃんも大好きだ。
言うならばマザコンでグランドファザコンかつグランドマザコン。
もはやファミコンである。何の話だ。
とにかく俺はバイトの休みと交通費が許す限り、帰省しまくっていた。

――――――――――――

ソファに座り物思いに耽りながらなんとなくテレビの電源を点ける。
乾いた笑い声をあげるテレビのバラエティー番組をぼんやり見ながら、次はいつ地元に帰れるかと考えていた。

「♪～♪♪～♪♪♪♪～」

突然、携帯の着信音が鳴った。
家族からのメールに設定した曲。

上京してホームシック度がマックスだったとき出会った曲だった。
何でここ来たんだ、どうしてこんな辛い思いをしなきゃいけないんだ。毎日のようにそんなことを考えていた頃。
郷愁を唄っていたその歌詞と自分の気持ちが重なりすぎて、思わず涙が出た程に、心が打たれた。
不意に流れるたった3秒程度のそのメロディにグッと胸が詰まる。

あ、泣きそう、
と思った瞬間涙がこぼれた。
一度溢れてしまうと、壊れた蛇口みたいに涙が止まらなくなる。
自分でも気付かないうちに溜め込んでたみたいだった。

今家には自分しかいない。
こぼれる涙を拭う気も起こらず、涙を垂れ流しながら呆然とテレビを見ている姿はさぞかし滑稽だっただろう。
どのくらい経ったかわからないが、しばらくそうしてただただ泣いていた。

――――――――――――

「……ダイジョーブ？」
頭上から不意に声が降ってきた。
思いがけず声をかけられ、勢いよく顔を上げる。
間延びした声の主は同居人の清水晴輝だ。
快活な名前とはびっくりするくらい対照的で怠け者である。
いつものけだるそうな顔のままで、特に心配そうな様子もなくそんなセリフを吐くな。
いやそんなのはどうでもいい、問題なのは鼻水涙垂れ流しのこの顔面だ。
どう言い訳すればいい？

晴輝の顔を見つめたまま瞬きすらできずにいた俺に、晴輝は少し首をかしげてみせた。
周りを見回しテレビが目に入ったのか、ああ、とつぶやく。

「何、テレビがそんなに…？」
「そ、そうそうさっきのアホタレントおっかしくて！マジ腹抱えて笑ったわ」

うーん、我ながらキビシイ言い訳だ。
完全に苦笑いだろうけど、顔に笑みを貼り付けつつその場からどうにか逃げ出そうとする。
が、先に涙を拭くべきだった。

「うおっ何すんだ返せよ」

何を思ったのか、晴輝にいきなりメガネを奪われた。
メガネは体の一部だぞこのやろう！
……と言う間もなくハンカチを顔に押しつけられ「へぶっ」とまぬけな声が出る。
何故ハンカチを持ち歩いてるんだこいつは。
変なところでしっかり者なのか。

ごしごしと顔を拭かれているというかこすられている間中ずっと抵抗していたが、晴輝はやめようともしなかった。
「ふざけんな」とか「このやろう」とか罵ってみたが効果なし。
そのうち満足したのか、いや何が満足だかわからないが晴輝はひとつ頷くと、

「今日は疲れた。寝る」

といって自室へ戻って行った。

呆然として、ハンカチを握ったままその場に突っ立っていることしかできなかった。

ていうかハンカチはいいから眼鏡を返せよ。

田舎に帰りたい　#2

晴輝とはじめて会ったのは、俺が中学生の頃。親父の葬式の時だった。

晴輝は親父のいとこの子供で、俺からすると『はとこ』というなんとも分かりにくい関係だ。
法事でもない限り互いの存在を知ることはなかっただろう。

なのに、初対面のはずの晴輝は俺に対する態度がどうもおかしかった。
葬式の間中ずっと俺を睨んできたのだ。というより、気に食わないというような目で俺を見ていた。

知らない間に恨みを買った覚えはまるでない。
というか、親父を亡くしたにも関わらず気丈に振る舞う俺に対する気遣いはないのか、と当時は思っていた。
いや、そんなこと考える余裕なんてなかったと思う。

親父が死んでからというもの、俺には同情の目ばかりが向けられるようになった。
一言も話したことのないやつにまで憐れまれ、腫れ物を触るかのように接せられた。
親父は俺が小さい頃から病を患っていたからある程度は覚悟はあったのだが、皆そんな事情は知らない。

ものすごく気遣ってくるやつ、好奇の目で見てくるやつ、そんなやつらにどう対応していいのかどうにもわからなかった。
だから俺は「いつでも元気」に見えるように振る舞うことにしたんだ。

どう見ても気張ってるとしか見えなかっただろうけど、そんな人間に対しては皆あまり物を言ってこないだろう。
そんな風に上っ面な付き合いをしていたらいつの間にか壁が出来ていた。
まぁそれは自分がまいた種だし、理解者は少数いてくれればいい。

それは置いといて。

仮面を被ることにも慣れて落ち着いてきた頃、葬式の時のことをふと思い出した。
周りの誰とも違う態度だった晴輝のことを。
正直言うと感じの悪いやつだな、という認識しかなかったが。

――――――――――――

高3になって俺は昔から志望していた大学に合格し、一年浪人していた晴輝もまた有名私立への進学が決まった。
大学が同じ都内でわりかし近かったこともあり、話がどうまとまったのかはよくわからないが、いつの間にか晴輝とルームシェアする

ことも決まっていた。
お袋も結構過保護だから、俺がひとりでいるよりはいいと思ったんだろう。
俺としても家賃が半分になるのはありがたいし。
一度会っただけの親戚と同居するのも少し気が引けたが……。
別に仮面を被っているので問題ないと考え直した。

そして共に生活してみて、晴輝は俺とは違う人種だと気付いた。
あいつはとにかくだらしがない。
家事は分担したものの実際ほとんど俺がやっているに等しい。まぁこれはただの愚痴だ。

人間関係もだらしがないんだか知らないが、複数の女性と電話して修羅場らしきものを演じていることもしばしばあった。
それは構わないが、彼女達を家に上げられない言い訳に俺を使うのはやめてほしい。
「同居人が怒るからー」ってなんだ。姑か。
妙な誤解を生んでしまう前に、その絡まった糸のような恋愛関係を解消してほしいと切に願う。

常にけだるそうな空気をまとい、まわりがどうであろうとまるで気にしないといった風情の晴輝。
髪は染めていないもののゆるくパーマをあてて、イマドキなファッションに身を包んでいる。

憎たらしいことにイケメンである。　モテないわけがない。

俺と晴輝は見事なまでに対照的だった。
俺は学業とバイトに忙しく、晴輝はサークルと遊びに忙しかった。
彼いわくサークル＝遊びらしいので、ほぼ遊びに忙しいということらしい。
学生としては俺の方が正しい生活を送っているはずなのに、何か負けたようなこの気持ちはなんだろう。

晴輝は朝俺が家を出る頃起きだし、俺がバイトから帰り寝ようとする頃に帰ってくる。
生活スタイルが根本的に違っていた。

同じ家に住みながら接点があまりない俺たちの間には、一年経たないうちに暗黙の了解が出来ていた。

『お互い必要以上に干渉しない』

これは俺にとっても好都合なことだった。
仮面を被る時間も減るわけだ。
晴輝は自分のことをあまり話さなかったし、それは俺も同じだった。

そもそも晴輝に対しては、あまりにだらしがないこともあって大して気を使うこともしなかった。
ひとつ年下の俺に小言を言われてもどこ吹く風といった様子で、図太いんだかプライドがないんだかよくわからないが、その点ある意味尊敬している。
正直少しは気にしてくれた方が俺としてはありがたいが。

葬式の時のあの態度はずっと心に引っ掛かっていたが、わざわざ掘り返すことでもない。

互いに干渉しないルールだ。
波風立たないのが一番いい。

――――――――――――

そんな調子で一年目はうまくやってきた。
今年もそんな調子でうまくやっていくつもりだ。

なのに。

「なんでお前今日起きんの早いんだよ…」
「だって今日のバイト朝番だし」

俺の独り言にご親切に対応してくれた晴輝は、眠そうな顔をしてだらりとテーブルに腕を伸ばしていた。
俺より先に晴輝が起きてくることなんて滅多にないのに、よりによって今日、何故。

あくびをしている晴輝を横目で睨む。
昨日みっともない姿を見られた俺は晴輝と顔を合わせるのも嫌だった。
我が家のルール、『ドゥノット干渉』に従いとっとと学校に行こうと思っていたのに。

もういい、ほっとこう。

なるべく下を向くようにして軽く朝食を用意していると、

「俺の分もよろしくー」

と間延びした声で言う輩が一名。

お前の頭でこの卵を割ってやろうかと言いたくなる気持ちをグッとこらえる。

平穏第一、平穏第一。

出来上がった卵焼きを一口食べると、晴輝は少し驚いたような顔をした。

「これ塩辛っ」

「うっせ」

人に作らしといて何様だっつの。

憮然としながら箸を動かしていると、正面から視線を感じた。

「……なんだよ」

「よかったじゃん、目。腫れなくて」

「な」

あえてそこを突っ込むのか。

今年２０歳になるような男がみっともなく泣いていたことをほじくり返されたいわけないだろ。察しろ。

スルーしてほしい空気を出しまくってることに気づいてくれ。

そもそも泣いていた理由がホームシックだ。情けなさすぎる。

まだ失恋などの方がましだろう。みっともないことには変わりないけれど。

酸欠気味の金魚みたいに口をぱくぱくさせ何も言えないでいる俺に、晴輝はにへらと顔を緩めた。

これがこいつの笑い方らしい。小馬鹿にしてるのか。

「旬は？バイトないの今日」

「あるけど……」

「なんだぁ」

「なんだってなんだよ」

別にー、と言いながら晴輝は卵焼きを食べ終えた。

俺の名前は旬太郎だが、「長くてめんどいから」と言って勝手に旬と呼び始めた。

普通のやつなら呼び名を変えるきっかけを作るための口実だろうなって気がするが、晴輝の場合だと本当にめんどくさくて変えたんじゃないかと思ってしまう。

そんなやつなのだ。多分。

その後、いつも通り学校へ行き、バイトへ向かう。

いつも通りというか…多少のイレギュラーはあったが、もう気にしないことにした。

今日のバイトは居酒屋だ。

地元に帰るための交通費を少しでも多く稼ぎたくて、最近掛け持ちで始めたのだ。

元々していたスーパーのバイトよりも稼ぎはいいのだけど、その分仕事内容もハードだった。
このバイトを始めてたった数週間だが、失敗は数知れず……。
今日は失敗しないようにしなくては。

田舎に帰りたい　＃3

「青木、レジよろしく！」
「は、はいわかりました！」

居酒屋は連日のように大盛況である。新学期が始まったばかりのこの時期では、どこも歓迎会やらなんやらで飲み会が多くなるのだろう。

お客さんや店員にぶつからないようにしながらレジへと向かう。座敷から廊下に上体を投げ出しているやつを踏みつけてやろうとも思ったが、こんなとこで憂さ晴らしして何になる、と思ってやめた。だいたい今日は失敗しないように、と誓ったはずだ。

「ありがとうございましたー」

レジの嵐をなんとかやり過ごし一息ついたころ、ドアの方から電子音が鳴った。客が来たらしい。
愛想笑いを顔に貼り付け、ドアの方に向き直る。

「いらっしゃいま……あ」
「あ、旬だ」

今一番会いたくない人間ナンバーワンがご来店なすった。
よっす、と片手をあげる晴輝の後ろには男女数名がごった返している。サークルの飲み会か何かだろうか。

「何モタモタしてんだよ」
「晴キュンの友達ィ？」
ピーチクパーチク騒ぐ後ろの数名に対して晴輝が「こいつ俺の親戚」とかなんとか説明している。
後ろもつかえていることだし、早いとこ席に案内してしまおう。
「ではお客様、こちらへ……」
「晴輝のダチならよぉ、割り引きしてくんねえかなァ」
「あ、いいねソレ」「ナニソレ超ウケルー」「ギャハハハハ無理だろ普通に」
後ろの数名に絡まれる俺。
「はは……」と苦笑いしつつひたすらに彼らの席である8番テーブル席を示した。
こういうやつらがほんとに苦手なんだよなあ。
どうにかこうにか席へ案内し、笑顔で早急に退散する。
できることならあのテーブルには近づきたくない……。
のに。
「青木くん、8番テーブルよろしくね」
「ハイ……」
ですよね。そうなっちゃいますよね。
露骨にぐったりした俺を心配してくれたのか、バイト仲間の一人が声を掛けてきた。
「大丈夫？　キツいなら代わるから休んでもいいぞ」

「いや大丈夫ッス。ありがとうございます」
「そうか？　無理するなよ」

心配そうに俺を見る彼女は郁（かおる）さん、俺のオアシスだ。
ショートカットでボーイッシュな言葉遣いだが、目のくりくりした小顔の美人さんである。
別に見栄張って言ったわけじゃない。郁さんが心配してくれたからちょっと元気がでたのだ。
頑張れ俺、負けるな俺。
郁さんが俺についてるんだ！

何一人で盛り上がってるんだとお思いの諸君、そう思わないとやってけないことだってあるんです。

――――――――――――――――

「そーれイッキ！イッキ！イッキ！」
「おおーやるねえ」
「ごっちんカッコイイ～」

８番テーブルは飲み開始から数分で出来上がった状態になっていた。
この雰囲気、１年の頃の新歓の時のことがフラッシュバックする。
「イッキ」の掛け声と手拍子、はやし立てるギャラリー、皆の期待と嘲りに満ちた目。
頭がくらくらしそうになる。いやダメだ、今そんなこと考えている場合じゃない。
店員としての職務を全うするんだ、俺。

「ビールお持ちしました〜」

意気込みだけはあるのだが、どうしても小声になってしまう。
お楽しみの方々のお邪魔にならないよう、自分の存在をできる限り消して、そっとビールを置く。

「あ、晴キュンのダチじゃん」
「あんたもちょっと飲んでけって」
「……は？　いやいや俺勤務中ですんで、あの」
「いいじゃんいいじゃん」

これだから酔っ払いは！！

晴輝の取り巻き（？）に絡まれ、俺はしどろもどろになる。
なぜ周りを巻き込むんだ。自分たちの中だけで楽しんでくれよ。勘弁してくれ。
俺の言葉にならない悲鳴にも気付かず、取り巻きに腕を引っ張られる。

誰か助けてくれ、と思っていたらふと晴輝と目が合った。
楽しそうでも、つまらなそうでもなくただいつものだるそうな顔で晴輝は俺を見ている。助けろよ。

「うわ危ないって、あ」

腕を引かれてよろけた俺はテーブルの上にあったジョッキと接触。
数本のビールが周りの人、床にぶちまけられる。

凍りつく空気。

「あーあ…」「しらけるわぁ」と非難の声が上がる。
なにこれ、俺が悪いの？
超シラけるのはこっちの方だよ。

「……どうしてくれんのコレ」

どうやらもろにビールを浴びてしまったらしい鼻ピアス系男子に詰め寄られた。
ものすごく嫌な予感がする。
そうだ、俺は店員なんだよな。自分が悪いわけじゃなくてもとにかく謝らなければいけないようだ。

「す、すみませんでした。今すぐタオルをお持ちしますので……」
「はあ？　この腕時計高いんだけど。弁償とかしてくれないわけ？」

するわけねーだろボケ。
なんて言えるわけもないので愛想笑いを貼り付け、この場から逃げるべく後退する。

「ふざけんなし。土下座しろ、土下座」
「なっ」

土下座というワードが出た途端、にわかに周りが盛り上がり始めた。
「それいいじゃん」「マジウケるんだけどー」「ぎゃはははは」なんて言いながらはやし立てるギャラリー。
まずい、この感じはまずい。
だいたいこんな頭の悪そうな連中に土下座するなんて嫌だ。鼻の穴が３つあるような人間に頭を下げたくない！
という俺の胸中とは反対に周囲はＤＯ・ＧＥ・ＺＡコールで溢れか

えった。
騒ぎを聞きつけた他の店員は助けを呼ぶべくスタッフルームへと走っていく。意外と薄情なのね。
誰か今すぐ助けてくれ。

「まったくー、何やってんだよ旬」
「晴輝……！」

この男、やっと助け船を出す気になったのか。遅いわ。

「土下座すれば許すってんだから、土下座しちまえよ」
「は！？　うわちょっとやめ」

おもむろに立ち上がった晴輝は俺の頭を押さえこみ、床に押し付けようとしてきた。
なんという男だ。もしや生粋のＫＹか。
晴輝のその行動で周囲はさらに盛り上がる。
そうか、こいつらみんな俺のこと馬鹿にしてるのか……。

――――――――――――

湧きあがる土下座コールの中、俺の頭を床にくっつけようとする晴輝とそうはさせるまいという俺の攻防戦は数分間にわたった。
白熱してるとも言い難いその戦いは、はじめ盛り上がりを見せたが、両者がどちらも譲らないのでなかなか決着がつかない。
周りも飽きてきたのか、コールの音量も減ってきた。早く店長来て

くれ。

首をねじり晴輝の顔を見ると、無表情だった。どうにもおもしろくないと言いたげである。
そこまでして俺に土下座させたいのか。こんな鬼のようなやつだとは思わなかったぞ。

不意に、晴輝が俺の耳元でささやいた。

「昨日みたいにみっともなく泣けばいいじゃん。泣き虫」

その一言で、俺の中の何かがぷっつりと切れた、ような気がした。

「この度は！」

突然大声を出す俺に、騒いでいたギャラリーも驚いたようにぴたりと静かになった。
皆の視線が俺に集まる。
もうなにも気にならなかった。

「まことに、申し訳ありませんでしたッ！」

両手を床につき、勢いよくおでこをビールくさい床にこすりつける。
これぞ外国人もナットクの見事なＴＨＥ・ドゲザである。

一瞬氷のように固まったその場の空気は、次の瞬間一気に解凍された。
大爆笑につつまれる狭い室内。

ぎゃははは と、皆下卑た笑い方だ。
でもそんな風に笑われてももうどうでもよかった。
自分でも自分のことを笑っていたからだ。
鼻ピアスさんが寄ってきてばしばしと俺の背中を叩く。痛い。
「おめえはよくやった！」
「兄ちゃんやるねえ、見なおしたわ」
見直すも何もないだろと思いながらも、こいつら酔っ払いだったと気づく。
酔っ払いには何を言っても無駄なのである。
晴輝も俺の頭をなでながら「よくできまちたねーよしよし」なんて言ってきて正直キモい。
しらふかと思ってたけど酔ってたのかこいつは。
そしてかなり出遅れてやってきた店長は、８番テーブルのある種和やかな雰囲気を目の当たりにして驚きながらも、俺に親指を立ててウインクしてみせた。
なにがグッジョブなんだ。その古いリアクションをやめろ。
あんたが早く来てればこんなことにならなかったのに、と思う一方でどこか清々している自分がいた。
こんな風にバカやって笑い合う（というより一方的に笑われてるけど）のは久々だった。
晴輝の顔を見ると、晴輝はにへらと顔を緩めた。
またこいつは俺を馬鹿にする。
でもまぁ、いいやという気分になったのだった。今日のところは。

帰省、そして同窓会　＃１（前書き）

事情により一部伏字となっております。

帰省、そして同窓会　＃１

「旬ー。飯まだ？」
「うるさい黙って待てよ」
「あ、しかもまた目玉焼きじゃん。飽きたー」
「だったら自分で作れアホ。ワカメヘッド」
「なんだとこのモヤシメガネ」
「黙れハグキ」

近ごろ毎朝こんな不毛な罵り合いをしている気がする。

居酒屋でいざこざあったころから、生活スタイルの全く噛み合わなかった俺たちに変化が起きた。
俺たちっていうか、晴輝が一方的に朝早く起きてきたり帰りがちょっと早くなったりとかそんな感じだ。
醜態を何度も見られた俺としては以前よりも関わりたくないほどなのだが……。

あまり構われたくないから慣れない罵り言葉を言ってみたりするものの、晴輝は逆にそれを楽しんでいるらしい。不愉快だ。
罵ることに慣れてない育ちのよろしい俺に晴輝も合わせてきて、結局こんな低レベルの罵り合いとなってしまう。
逆に聞きたいが高レベルの罵り合いってなんだ。誰だそんなこと言ったのは……俺か。

そんなとりとめのないことを考えながら、黙々と朝食を口に運ぶ。
あ、顔を合わせたんだから一応晴輝に言っておかなければ。

「おいハグキ、俺週末地元帰るから」
「またかよ。お前も物好きだよなー。こっちの方が絶対楽しいのに」
「お前には俺の地元の良さがわからないだけだろ。ジモティ舐めんな。ていうか帰るのは同窓会があるからだし」

「なんだ、先に言えよ」と言いながら晴輝は背もたれに寄りかかった。

土曜の夜には高校のクラスの同窓会があるのだ。
高校と言っても中高一貫の男子校だったので、中学の頃と大して変わらないメンバーだけど。
男ばっかで同窓会なんてむさ苦しくないのかとは言わないでほしい。
俺もそう思うからだ。

「同窓会か……なんか楽しそうだな」

お、なんだか羨ましそうな顔してやがる。
晴輝の通っていた高校は結構風紀が悪くて、同窓会とかあんまりないって言ってたもんな。
ふふん、せいぜい指をくわえてこのコンクリートジャングルでお留守番してるがいい。俺は大自然の中旧友たちとエンジョイしてくるぜ！

俺が妙な優越感に浸っていると、晴輝が何か思いついたようにポンと手を叩いた。

「よし、俺も行く」
「ふふーん……。え、どこに？」
「お前の同窓会」

「はあ！？」

何を言ってるんだこいつは。

「ダイジョーブ、元々このクラスでしたって空気だしとくから」

「いやいやいや、無理だろ。アホだろ！」

「同窓会の幹事誰？」

「え、な、野中ってやつだけど……それが何」

「まあまあ」

にやけ顔で晴輝は携帯をいじりだした。

なんだこの悪そうな顔は。悪だくみしてますと言わんばかりだ。

嫌な予感しかしない……あ。

「それ俺の携帯じゃねえか！　何してんだ返せ！」

「まあまあ」

何がまあまあだふざけんな。

携帯を取り返そうと躍起になっていると、携帯からピロリロリーンと着信音が鳴った。

「返信早いなー」

「だ、誰から……」

「野中クン。同窓会、ひとり増えても全然平気っていうかむしろ大歓迎だってさ」

「……」

もう突っ込む気力すらない。

だいたい飛び入り参加大歓迎の同窓会ってなんなの。

がっくりと肩を落とした俺とは対照的に、晴輝はルンルンと言いながら（ほんとに言っていた）家を出て行った。

ん？

家を出たって……今、何時？

「あああもう！　チクショウあいつのせいだ！！」

この不毛な会話のせいで、俺は一限に遅刻する羽目になったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

待ちに待った……とは言い難い週末。

電車を乗り継ぎ、晴輝を急かしぎりぎりでバスに飛び乗る。

一本逃すとなかなか次が来ないのだ。

「へえー。ほんと田舎なんだなあ」

「なんだよ、お前だって上京してきたくせに。田舎住んでたんだろ？」

「いえいえ、これほどでは」

バス停から周囲１００メートル程広がる青々とした田んぼを見ながら、晴輝が呆けたようにいった。

都会の喧騒とは違い、人のものでない小さな音が耳に心地よく響く。

ああやっと帰ってきた、と実感する。

電車で駅に到着した時に駅が無人であることに驚いていた晴輝だったが、バスでこの地に着くころには早くも田舎というものがわかってきたらしい。
コンクリートのしかれていない道にカエルが飛び出してきても動じなくなった。一度目はみっともなく悲鳴をあげていたので次はムービーを撮ってやろうと思っていたのに、残念極まりない。

のんびりと田んぼ道を二人して歩く。
朝早くに晴輝を叩き起こして出発したが、着いたころにはにはもう日が高くなっていた。
爽やかな空気が流れる。なんだか腹が減ってきた……。

うーん、それにしても何かおかしい。
よく考えれば、来る時も電車やバスの中で俺たちはＤＳ対戦に白熱していた。
いい歳こいてポチットモンスター、通称ポチモンである。笑うことなかれ、おもしろいゲームは全世代共通でおもしろいものだ。
晴輝が大人げなく勝負を仕掛けてくるから仕方なく乗ってやったのだが、隣のガキンチョに軽く睨まれるくらいにはしゃいでしまったのは事実である。

晴輝のことなんて俺とは合わないやつ、気に食わないやつだと思っていたのになあ。
わからないもんだ。

「ただいまー」

「お邪魔しまーす」

ガラガラと引き戸を開けて、居間に向かって声をかける。

とりあえず晴輝も俺の家に来ることになった。

ていうかほんとに出るつもりなのか、俺の同窓会に……。

ぱたぱたと足音がして、お袋が玄関先にやってきた。

「おかえり……うわっあんたまだ髪染め直してないの？　あら晴輝くんお久しぶり」

「お久しぶりッス。お世話になります」

「いいのよいいのよー」とお袋は片手を上下に振りながら言った。

おばさん特有のあのリアクションである。

にしてもなんだか俺の扱いだけひどいよね。

まあ毎月帰ってるからこう、新鮮味とかないしね。仕方ない。

「旬太郎、おみやげは？」

「はいはい、あるって」

お袋は俺が帰るたびにお土産を要求してくる。

多分都会の食べ物とか物珍しいからかな。俺はお袋の作る飯とか、菓子の方が好きだけど。

「あらーなんか今日のは豪華じゃない？」

「や、晴輝も金出してくれるって言うからちょっと奮発した」

「あらあらー。ありがとう、晴輝くん」

おっとぉ、俺はスルーですかそうですか。

ちょっと拗ねていたら、お袋がおかしそうに笑った。

「いい歳して拗ねてんじゃないわよ。昼ご飯はあんたの好きなチラシ寿司だから、早く手洗ってきなさい。晴輝くんも」

「まじで？　やったー」

飯ごときにはしゃいでしまう俺を晴輝が驚いたように見る。

なんだ、悪いかよ。お袋のチラシ寿司は尋常じゃなくうまいんだからな！

とはいえこいつの手前きゃいきゃいはしゃいでしまってどうにも恥ずかしい。

誤魔化すようにひとつ咳払いすると、晴輝はぷっと噴き出した。

「な、なに笑ってんだよ」

「いやあ、無邪気で可愛いなあと思って」

「な」

可愛いって形容詞はおかしいだろ。

やっぱりこいつを連れてくるんじゃなかった。またしても醜態さらした気がする。

赤くなった顔を隠すように洗面所に向かう。と、後ろから晴輝の声がした。

「おーい、洗面所どこー？」

「こっち！！」

「なんだよー、まだ拗ねてんの？」とだるそうに歩いてくる晴輝と顔を合わせないように、細心の注意を払う。我ながらおかしなところに神経を使っているなとは思う。

「洗面所出て、左が飯食うとこだから」
「はいはい」
そう答える晴輝の声色がまだ笑いを含んでいることは、この際無視することにした。

一足先に食卓に着くと、目の前にはうまそうなチラシ寿司が。しかしこれ多すぎないか。
お袋はいつもそうだけど余計に飯を作りすぎるんだよなあ。そしてそれがご近所様方におすそ分けされるわけだが。

そういえば妹の姿が見えない。
妹の景子（けいこ）は今年高校2年生になる。
まあまたどっか二輪でも乗りまわしているんだろう。確か今の高校生は土曜は休みだったはずだ。

「晴輝くん、座って座って！　じゃあいただきまーす」
「いただきまーす」
「……いただきます」

食事はなるべく家族揃って、挨拶もかかさずするのは我が家のポリシーだ。
ちなみに爺ちゃん婆ちゃんは飯を食うのが早いので、例外である。
ナチュラルに手を揃えて食事前の挨拶をした俺とお袋に、晴輝は一瞬面食らったようだが倣って挨拶をした。
普通はあまりこういうことしないのだろうか。
我が家では親父がいなくなる前からやっていたことではあるが、い

なくなってからはますます家族の時間を大切にするようになった。
景子も二輪を乗り回すやんちゃ娘ではあるが、素行が悪いわけでも、不良というわけでもない。
今いないのもたまたまだろう。

二回ほどおかわりしている俺を見て晴輝が目を丸くしていたころ、表の方からエンジン音が聞こえた。

「あ、景ちゃんだわ」
「何、買い出し？」

買い物に行くにも乗り物がないと不便なのだ。
都会へ出てその交通の便のよさに驚いたものだ。

バタバタ音をたてながら景子が居間にやってくる。

「ただいまー。あ、兄貴また帰ってきたんだ。髪の色いい加減戻しなよ。そちらさんは……誰だっけ」
「またってなんだ。髪はほっとけ。こいつは“はとこ”の晴輝だよ。一回くらい会ったことあるだろ？」
「どもッス」

晴輝が軽く挨拶すると、景子は頬に手をあて「ええー？」と驚く。

「こんなイケメンの親戚いたら忘れないけどなぁ……。あ、ごめんなさいね」

ウフフと付け加えながら景子も食卓につく。
こいつも最近ますますお袋（の言動とリアクション）に似てきた。
……単に老けただけか。

ぎろりと景子が睨み付けてくる。
いやいや何も言ってませんよ。

「なんか失礼なこと考えてたでしょ」
「えっそんな顔に出てたか？」
「こんにゃろ」
「いでっ」

景子が足を思いっきり踏ん付けてきた。痛い。
勘弁してください。

「食事中なんだからやめなさい景子。だいたい買い出し頼んだのも晴輝くんが来るからでしょ。忘れるなんて失礼じゃないの」

結構前のことを掘り返してきて注意するお袋。どうやら癖らしい。

そもそも景子が晴輝のことを覚えていなくても無理はない。
景子は葬式の間中ずっと泣いていたから、誰がいたかなんて覚えてないだろう。

黙々と飯を食ってた晴輝は、不意に自分の名前が出てぱっと顔を上げた。

「え、そんなお気遣いとかいいっすよ」
「違うのよ、だいぶ前からお風呂壊れてて」
「さすがにお客さん来るからちょちょいと直しちゃおうと思って」
「あれまだ直してなかったのかよ……」

一月前帰省した時も、まだ肌寒い時期だというのに湯が出なくて散

々だったのだ。
このときばかりは晴輝に感謝した。

俺も景子も結構機械とかには強くて、昔から何かを直すのは得意だった。
だから俺は工学部に進むことにしたけど、景子は卒業したら就職するらしい。
もったいないとは思うが、大学に行かない代わりに二輪の免許も取ったわけだし本人の決意は固いんだろう。

こういう話になると自分は何をやってるんだと胃が痛む思いなのだが……。
今は忘れよう。うまい飯もうまくなくなってしまう。

「やっぱ百合子さんのご飯はうまい！あ、そういえば兄貴今日同窓会だっけ」

百合子さんとはお袋のことである。
どうやら母と娘というのは友達みたいな間柄らしい。

「うん、そんでお前に乗っけてってもらうつもりだったんだけど」

ちら、と隣の晴輝を見やる。
きょとんとする晴輝の頭には疑問符が浮かんでいる。

「お、伝説の三人乗り！　いっちゃいますか」
「アホかお前、免許取り消されるぞ」

ああ、と晴輝も納得したようである。

俺は免許を持ってないので景子に乗せてもらうつもりだったが、晴輝も行くとなると足がない。
何度も往復してもらうのはさすがに悪いし……。というか突然過ぎてそこまで頭回らなかったわ。
晴輝がひょいと片手を上げた。
「俺普通免許あるけど」
「あるの！？」
「マジで！？」
こんな怠け者に免許が取れたことに驚きだが、景子まで驚くことないだろ。ノリだろうけど。
「んーじゃあ爺ちゃんの軽トラ借りなよ」
「まあアレも二人乗りだけどな……」
「兄貴は荷台でしょ？」
うん、まあ小さい頃はここが俺の特等席だ！　とか言ってたこともあったけど。
あそこひとりで乗るの寂しいんだよな。ドナ●ナを思いだすし。
あれ、ていうか景子は一緒に行かなくていいんじゃね？　なんだこの流れは。俺を荷台に乗せる流れはやめろ。
椅子から立ちあがった晴輝がうーんと伸びをしながら言った。
「運転なんて一年ぶりだなぁ……。あ、便所借りていいすか」
「そこの角にあるわよー」
「どもッス」と言いながらだらだら歩く晴輝の背中を見、俺と景子

は顔を見合わせた。

「……マジで？」

帰省、そして同窓会　＃2

不安だ。ものすごく不安だ。

一年の春に免許を取ったという晴輝は、完全にペーパードライバーだった。
まあ確かに今俺らが住んでいるアパートからは電車でどこへでも行けるから車に乗る機会はほぼなかったと思うけど。
なんで免許取ったんだと思うが一年は割と余裕があるので、取れるものは取れるうちに取ってしまえというのが今の大学生の流れらしい。

「えっとー流れはだいたい覚えてんだけどね」

晴輝はビシッと左側を指差して「巻き込み確認！」とか言い始めた。
どや顔の晴輝には大変申し訳ないが俺には何のことかさっぱりである。

気のいい爺ちゃんは、晴輝のようなペーパードライバーにも一つ返事で軽トラを貸してくれた。
愛車を傷つけられるかもしれないのに縁側で茶をすすっている爺ちゃん。
しかしさりげなく監視してるんではないかと俺は内心思っている。
爺ちゃんの軽トラに乗った晴輝は、景子と一緒にああでもないこうでもないと言いながら車をいじり始めた。
俺は荷台に乗ってその様子を見守っているところだ。

果てしなく不安である。

「なんだっけ、ギア？」

「あ、そうそうこれを操作して……でサイドブレーキオフ、いざ発進！」

「うおおっ」

にわかに車体が動き始めた。

……後ろに向かって。

「おいどうなってんだアホ共！　……うわあっ」

「ヤバイ晴くん後ろ！　倉庫！」

「やべっ」

ガツン、と鈍い音がした。

幸い車体が倉庫の壁に触れた程度で済んだが……。いきなり後退するとは何事だ。

「やーごめんごめん、ギア間違ってた」

「これRじゃん。ドライブのDでしょ」

「わははそうだった」

わははじゃない。勘弁してくれ。

恐る恐る爺ちゃんの方を窺うと、目を丸くして言葉もでないようだった。

ごめん爺ちゃん……。今度芋ようかん買って帰るからね。

そしてその後夕方になるまで晴輝の特訓はつづいたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日も落ちてきて、俺たちを乗せた軽トラは待ち合わせ場所へと向かっていた。
晴輝も昼間の数時間の練習でカンを取り戻したらしく、今のところ何事もなく運転している。
そうそう、景子も夕方から友達と遊ぶとかなんとかで、結局途中まで一緒に行くことになった。
というわけで。

「……」

荷台でひとり膝を抱えて丸くなる俺。
真向かいに見える夕日が眩しい。
俺の家の辺りは人通りも少ないからまだよかったが、待ち合わせ場所のジャストの辺りは夕方でも人が多い。
この辺りは店やら学校やらが密集していて、渋滞することもしばしばである。
荷台に乗っていると、信号待ちが特にキツい。
後続車の運転手とモロに目が合うのだ。
前を向くのもなんだかアホっぽい気がして（荷台に乗る時点でアホなのだが）、とりあえず運転席に寄りかかり膝を抱えて顔が見えないようにうずくまっていた。

そういえばずいぶん昔、おんなじようなことがあったっけ。
まだ親父が健在だった頃、俺は仕事に行く爺ちゃんと親父に駄々をこねて当時お気に入りだった荷台に乗せてもらった。
危ないからダメだ、と言われたのにあの頃の俺はきかん坊だったのだろう。
爺ちゃんは心配してたが親父は「乗りたきゃ乗りな」と呆れたようだった。

乗り始めはよかった。
風は気持ちいいし景色がびゅんびゅん過ぎ去って行くのも爽快だった。
でも何十分もそうしていると、飽きてくるし後ろの車の運転手は怪訝な顔をするしで、小さかった俺はわんわん泣いてしまったのだ。
そして、お巡りさんに注意されて、運転してた親父は「イハンキップ」を切られ……。
……あれっ、もしかしてこれ違反なんじゃないの？

「おーい、そこの荷台に乗ってるアホー」
……ヤバイ。
もしかしてお巡りさんか！？
「おいそこのアホ、アホメガネ！」
「なんだとこのやろ……あ」

小学生並みの罵り文句に思わず顔を上げると、見慣れた顔が笑っていた。

「番長！　ヤス！」

ちゃっちいスクーターに二人乗りしてアホ丸出しなのはお互いさまだろうに。

ヤスと番長は高校の同級生だ。
高校どころか小学生からずっと一緒の腐れ縁である。

運転している強面の浅黒い大男が番長、後ろにひっついてるチビがヤスだ。
相変わらずのでこぼこ具合だが、昔はよく真ん中に俺をはさんでアホ三兄弟なんて言われたものだ。
余談だが、親父が死に俺が周囲との壁を感じ始めていたころ、周囲とのパイプ役となって輪に入れるようにしてくれたのもこいつらである。
「明日は雨か？」「いや天変地異だ」などと言われるのは目に見えてるので、口が裂けても感謝してるなんて言えないが。

それと言っておくが俺は勉強はちゃんとしていたのでアホなんて言われるのは全くもって心外である。
ヤスいわく「旬は勉強出来るけど馬鹿」だそうで。矛盾してるだろ。

そして今ヤスは俺を指差しながらぎゃはははと大爆笑している。
この感じ……つい先日あったような。デジャヴというやつか。

「なんで旬、荷台乗ってんの！？　ド●ドナ実写版かっつうの！」
「あれか、荷馬車がごとごと……。子牛っていうかメガネザルだけどな」

クールに返したのは番長だ。
名前を邦弘（くにひろ）というが、昔から『長』に関連するあだ名ばかりついており小学校では班長、中学で組長、最終的に番長で落ち着いた（？）ようである。

「いやこれには事情があってだな……」
「事情？　……ていうかどちらさん？」

ヤスは運転席の晴輝を不思議そうに見た。
ちなみに今は信号待ち中である。

「こいつは“はとこ”の晴輝。まあ後で紹介するよ。こいつも同窓会行くし」
「え！？　そうなんだ……。えと、よろしく」
「よろしくッス」

運転席から晴輝が会釈したのが見えた。
ヤスは「こんな同級生いたっけ？」という顔で必死に記憶の糸辿っているらしい。
まあ正しい反応だ。
今さらながらこいつを連れていって大丈夫なのか、心配になってきた。

「いやまあ、詳しいことはあとで……うおっ」

信号が青になったのか、突然車体が動き出した。

晴輝はどうも発進が苦手らしい。

「お、おお、また後でなー」

ぽかんとする二人を残し発進したので、手を振りながらそう言った。

だんだん離れていく二人が大爆笑しているのがわかる。

そんなにおかしいか。悪いかドナド●で。

帰省、そして同窓会　＃３（前書き）

思いがけずＧＬ要素が出てきてしまいました。たいしたアレじゃないのですがご注意ください。

帰省、そして同窓会　＃３

晴輝の危なっかしい運転で事故にあわないかヒヤヒヤしていたが、なんとか無事にジャストに到着した。

土曜の夕方のジャストは親子連れや買い出し中の主婦、部活帰りの学生やらなんやらで結構な賑わいである。

「晴くん、ありがとね。お酒飲んじゃダメだよー。じゃあね、二人とも」

そう言って景子は友人グループのもとへ走って行った。

同窓会は終わるのが遅いだろうから帰りどうするのかと思っていたが、帰りは二輪で送ってもらうんだとか。

……あいつ、変な虫ついたんじゃないだろうな。

シスコン魂を燃やしていると、晴輝にこづかれた。

「いつまでぼけっとしてんだよ。行こうぜ」

「お、おう……。てかほんと今更だけどマジでお前同窓会来るつもりなん？」

「うん。なんかどうにかなるっぽいし」

「何がだよ……」

もはや意味不明だ。

そんな言い合いしながら待ち合わせ場所のゲームセンター前に向か

う。
待ち合わせ相手は先ほどの2大アホである。
ゲームセンターに向かって歩いていると、前方にでこぼこコンビが見えた。
「ちゃっーす」
「おう、来たか。子牛、じゃなかったメガネザル」
「そのネタもういいだろ……」
軽く挨拶をした二人は次に晴輝の方を見やった。
「えと……お久しぶりだっけ」
「なんでだよ。“はとこ”っつってたろ。同じ学校じゃねえべ」
「いや“はとこ”だって同じ学校に通うことあるじゃん」
「あ、そうか。じゃあ久しぶり」
「いやー俺としたことがうっかり忘れてたわ。あ、身長伸びた？」
勝手にコントをし始めたでこぼこコンビに、晴輝はぽかんとしている。
やはりこの二人とひとくくりにされるのは甚だ心外だ。
しかし、こちらも二人に負けず劣らずアホなことをしようしているわけだが……。
「ていうかむしろ骨格変わっちゃった？」
「いや聞けよアホ。こいつ、同じ学校じゃないんだけど、俺らの同窓会行きたいって言いだしてさ」
今度はヤスと番長がぽかんとする番だった。

「それまたどうして」
「いやなんかノリで。野中クンもいいって言ってたし」
晴輝がえへへと照れながら返す。なぜここで照れる。
「ああー、なるほど。まあ晴輝さんみたいな人がいたほうが盛り上がりそうだしな」
「は？　どゆこと？」
うんうんと頷くヤスと番長を交互に見るが、全く意味がわからない。なぜか隣の晴輝まで「あ、そう？」とどこか自慢気である。
なんだなんだ、どういうことだ。
なぜか晴輝まで何か知っている風だし俺だけのけ者か。拗ねるぞちくしょう。
「まあまあ、旬も行けば分かるって」
俺が拗ねる前にそう言う番長の隣で、なぜかヤスは暗い顔をしている。
なぜそこでヤスがへこむのか。
今日はなぜなぜばっかりだ。わけわからん。
「ていうか早く行かねえと遅れちまうぞ」
「あ、そうそう！　ほら行こうぜ晴やん」
訝しむ俺を無視して歩きだす三人。
ちゃっかり晴輝も馴染んじゃってるし。
景子ともすぐ打ち解けてたし、こいつは人と接するのがうまいのかもなあ。俺はなかなかそうはできないので羨ましく思う。

まあ二人が気のいいやつだってこともあるだろうけど。

遅れて俺は三人の後を追い歩き始めた。
夕方ということもあり、ゲームセンター付近には学生の姿が目立つ。
三人の後ろ姿をぼけっと見ていると、はるか前方に見覚えのあるシルエットがあった。
すらりと高い身長、短く明るい栗色の髪……。
あの人は。
俺は弾かれたように走り出した。

「うわ、なんなの旬」
「あ、おいどこ行く……」

三人を追い抜かしてなお走る。
訝しむ二人の視線と、相変わらずけだるそうな晴輝の目線を華麗にスルーしひた走る。
目標の人の元へたどり着くと、振り返ったその人は驚いたような顔をした。

「旬太郎！？　そうか、お前も今帰省中だったっけか。しっかしこんなとこで会うなんて奇遇だな」
「や、ほんと奇遇ッスね！　マジびっくりしました」
少し息を整えながら、俺は郁（かおる）さんの顔を見た。

彼女は居酒屋のバイトの先輩だ。
実は、俺の憧れの人だったりする。

「地元近いって聞いてましたけど、まさかジャストで会うなんて思いませんでしたよ。ここよく来るんですか？」
「いや、今日はヤボ用でな。お前はこのあたりに住んでるんだっけ」
「近いってわけでもないですけどまあ、一番近くてでかい店ここしかないんすよ」

「まあ田舎だしな」と言って郁さんは笑った。

見た目も言葉遣いも男勝りだが、彼女はれっきとした女性である。
店長に確認したので間違いない。

バイト中に雑談していて地元の県が隣だと聞いた時は、ジモティの俺としてはすごく親近感が湧いたのだが、まさかこんなところで会えるとは。
ここも県境だし、ちょうどお互い県境に住んでいたらしい。もっと早くに聞いておくんだった。

俺と郁さんが談笑していると、郁さんの影にいた女性がひょこんと顔をだした。
髪を巻き白いワンピースを身にまとい、きらきらしたオーラがにじみ出ている華奢な女の子だ。

「郁、この人だあれ？」
「ああ、こいつ俺の後輩なんだ。旬太郎っていうんだけど」
「ふうん、そうなんだあ」

「あ、えと。どうもッス」
中高一貫男子校6年のキャリアを持つ俺は、どうにもこういうきらきらした女の子が苦手だった。
未知の生き物に近い。
「なんでもいいけど、早く行こうよぉ。みーんな待ってるよ」
「それもそうだな。じゃあ行くか、優美」
この子は優美さんというらしい。
郁さんと会えたことに舞い上がってしまって考えてなかったけど、郁さんも用があったからここ来てたんだよな。
「すいません、引きとめちゃって」
「別にみんな郁が遅れたって怒らないんだけどねえ。みんな良き妻だから」
「……は？」
妻とはなんのことか。
郁さんは苦笑いして手を振った。
「旬太郎、あんまり気にしないでくれ。俺ら女子校だったから、ふざけて言ってるだけだし」
「あ、ひどーい。旦那が不真面目だとみんな泣いちゃうよ」
「何人も妻がいる時点で誠実じゃないだろ……」
「は？　え？」
優美さんは全く理解できていない俺の顔にびしっと指差した。
「あのねえ、私たちみんな郁の妻なの。ちなみに私は第一夫人！」

「え」
「今第九夫人までいるんだよ。第十夫人は募集中ー」
語尾にハートマークがつきそうな勢いでそう言い放った。
女子校。またしても未知の世界である。
どうやら、男の俺から見ても男前な郁さんを旦那に見立て、女子数名で夫人を演じる夫婦ごっこというわけか。
男子同士の慣れ合いとはまるで異なり、俺にはまるで理解できない。
未知の世界だ。
理解できない、のに。
「あの！」
突然天に向かって高く手を挙げた俺を二人が不思議そうに見る。
「俺、第十夫人に立候補します！！」
その場が凍りついたのは、言うまでもない。
この時俺の頭が沸いていたこともまた、言うまでもない。

帰省、そして同窓会　＃４

ルンルンとスキップしながら俺が三人の元へ戻ると、少し離れたところから一部始終を見ていたらしいあいつらは三者三様の表情をしている。

一番右の番長は目を丸くしてまばたきを繰り返して、真ん中のヤスはちょっとドン引いたように顔がひきつっていたし、一番左の晴輝は相変わらずのダルい顔をしていた。

こうして見ると晴輝も結構アホっぽいな。
よし、アホ三兄弟・次男坊の座を譲ってしんぜよう。
これで俺も晴れてアホ三兄弟脱退できるというものだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

数分前。
先ほどとんでもなく阿呆なことを言い放った俺に一瞬凍り付いた郁さんだったが、すぐに腹を抱えて笑いだした。

「夫人て！　お前男だろ！　アホじゃないのか！？」

高らかに笑う郁さんは相当ツボにはまったのか、とうとうその場にうずくまってしまった。
郁さんにそんなに楽しそうにしていただけて俺としても本望である。
そんな郁さんとは対照的に落ち着いた様子の優美さんは、俺を睨み

付けて言った。

「ちょっとお、何勝手なこと言ってるの？　夫人候補狙ってる子なんてたくさんいるんだから。簡単になれるなんて思わないでよね」

優美さんは性別の差など気にすることなく対等に接してくれる大変懐の広いお方であるらしい。

俺だって郁さんが高嶺の花だとわかっているので、優美さんの言うことはもっともである。

あれ、ていうかこれもしかしなくても暗に告白したことになるのか？

いやしかし直後に大笑いされ返事も聞けない告白など前代未聞である。

よってこれは告白には含まれないということでひとつ。

告白とは校舎裏でするものだと相場が決まっている。大学生にもそれが適用されるのかは疑問であるが。

依然として俺を睨み付ける優美さんを制し、郁さんはやっとこさ立ち上がった。

ひいひい言いながら苦しそうであるが、しっかり俺を見て言った。

「よせ、優美。……俺は旬太郎を第十夫人と認める」

「郁、そんな……！」

郁さんの胸にすがりつき、訴えるような目で見る優美さん。

字面だけだとまるでドラマのようなの光景だが、実際はというと郁さんは肩を震わせ堪え切れず噴き出してしまう有様である。

「くそ、腹いてぇ……。旬太郎、お前サイコーだわ」

なんと。
お墨付きまでいただいてしまった。
いやあそれほどでも、とデレデレする俺が気に食わないのか、優美さんがその小動物のような目を釣り上げた。
そしてそのまま引きずるように郁さんを連れて行ってしまったのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

事の顛末を話したところで、三人の表情は先ほどとまるで変わらなかった。
ヤスが苦虫を噛み潰したような顔で言う。
「俺……旬が男好きだなんて知らなかった」
「いや俺の話聞いてた？　郁さんは女だぞ？　ヒール履いてたろ」
「だって旬よりも背高いし」
「だからそれはヒール履いてるからだっつの！」
俺が地団駄を踏みながらまくし立てると、先ほどまでぽかんとしていた番長がやっと口を開いた。
「つうか、さっきお前が夫人になるとか言ったけど、相手って……」
「女ですが？」
「お前は」
「男ですが？」
「……お前いつ酒なんて飲んだんだ」

呆れ顔をして番長はため息を着いた。
もちろん俺はこの時しらふであったが、どうしようもなく頭が沸いていたことは事実である。

「よーしお前ら！しゅっぱーつ！」

スキップしながら同窓会の開催地である居酒屋へ向かう俺を、三人はなんとも言いがたい顔で見ていたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

同窓会の行われる居酒屋は俺の地元にあるくらい有名なチェーン店だ。

俺たちが到着したときには、座敷にはクラスのメンバーは大方揃っていた。
わいわい騒がしい中、開いているテーブルにつく。
俺らが来たことに気付くと、幹事の野中がひょいと手を上げた。

「おう、来たかアホ三兄弟！」

そして、この場では完全部外者の晴輝を見て、

「そちらさんが助っ人さん？　いやあ、こんなイケメン来てくれたら盛り上がりそうだな」

またしてもこれか。

いまだにこの言葉の意味がわからない俺。
いい加減教えろ、と後ろのヤスに問いかけようと振り返ると、ヤスはまた暗い顔をしていた。
なんなんだ一体。

俺だけ訳のわからないまま席につく。
座敷の大部屋はふすまで区切られているようで、ふすまの向こうの部屋からは他の団体客がわいわい騒いでいるのが聞こえてきた。

「お隣は女の子の団体みたいだな」

きゃぴきゃぴと黄色い声が聞こえたので、何とはなしにそう言った。
ヤスが呆れ顔をする。

「おっまえ、まだ気付かねえの？だから……」

その時、手にマイクを持った野中がサッと立ち上がった。

「さてさて、あらかたメンバーも揃いましたので、同窓会を始めさせていただきます！」

「ウェーイ」となんらかの掛け声がかかる。

「男だけなんてむさ苦しいとお思いの諸君！　今回は趣向を変えまして、姉妹校との合同コンパとさせていただきまぁす」

「ウェーイ！！！」と益々盛り上がる周囲。
野中がふすまの方を示すと、ババッとふすまが開いた。
ふすまの向こうには俺たちと同じように、ただ全員女子だが、一クラス分の人が座っている。

「こちら、姉妹校の元三年B組の皆さんでーす。よろしくねー」
「よろしくお願いしまあす」

女子組からも声があがる。
女子たちはこちらを窺いながら隣の子とひそひそ話している。品定めといったところだろうか。
心なしか、俺の隣の晴輝に対する視線が少々熱い気がしないでもない。
俺は引き立て役ということか。晴輝このやろう。

ちらと晴輝を見やると、晴輝もまたこちらを見てにやりとした。
こいつ、知ってやがったな。

確かに考えてみれば、女好きで有名な幹事の野中が男だらけの同窓会など開くわけもない。

しかしこれでヤスがへこんでいた理由がやっとわかった。
ヤスには既に彼女がいるからだ。

「はい、では皆さん。乾杯の前に席替えしましょう！　えーと、そことそこがチェンジで……」

幹事の野中がてきぱきと指示をする。

俺と番長はヤスに腕をがっちり捕まれ、ヤスの両サイドをガードする形となった。
よくわからないが、普通女の子は正面に来るのではなかろうか。

「ほらほら、晴輝さんはこっち」

晴輝は野中に拉致され、女子の真ん中に放り込まれたようである。
そのあたりで女子の黄色い悲鳴があがる。イケメンなぞ滅べばいい。
しかし晴輝の女子吸着力のおかげで女子の数が減り、結果的に俺たち三人の向かいは空席となった。
なんだこれ。まあ構わんけども。

「はいじゃあ、カンパーイ」
「カンパーイ」

和気あいあいとした輪から完全に外れた俺たちは、乾杯の後は普通に飲み食いしていた。

「はあ……彼女に怒られるよ」

合コンには露ほど参加してないというのに、ヤスはさっきからため息ばかりついている。

俺は県外の大学に進学したのだが、ヤスも番長も地元の大学に進学していた。
男子校では女子にご縁などなかった俺たちだが、ヤスも番長も大学で彼女をゲットしたようである。
言っておくが俺だって工学部でさえなければ彼女出来た自信はある。
というかそう言い訳しないとやってられない。

ちっこいヤスの彼女は、ヤスよりもさらにちっこくて華奢な女の子らしい。が少々ヒステリックなところがあるんだとか。

「別にただの同窓会だったって言えばいいだろ」

「いや、ダメ！　絶対バレる！」
「なんでだよ」
「なんか女の勘的なアレがヤバいんだもん」
だもんとか言うな。
「全くしょうがないな……。まあ、野中らが男だらけの同窓会開くわけないもんな」
「俺らを巻き込むなっつう話だよ」
ムスっとしているヤスの頭に手をぽんと乗せる番長。
そういやこいつも彼女いるじゃねえか。
「番長の彼女は怒ったりしねえの？」
「いや、合コン風の同窓会に行って来るって言ったら爆笑された。アホだとさ」
「はあ」
こいつは昔からばか正直だからな。
年上だというその彼女さんはやはり大人の余裕があるのだろうか。
ヤスの彼女も見習うべきだな。
「そういう旬はどうなんだよ？　最近」
「う……うるせーよ。工学部にいい出会いなんてねえんだよ」
隣のヤスが黙って頷き肩に手を置いてくる。
「めげんな」
「……こんにゃろう」
「まあまあ。しっかし今日晴やんと一緒に来るなんて思わなかった

な。一年の頃は会話すらないっつってたべ」
「あー……なんか最近あいつ慣れ慣れしいっつうか。なんか知んねえけど」
いや、きっかけがあるとしたらあの日、家で一人泣いていたのを見られたことだろうけど。
そんなことは口が裂けても言えない。
「つうかあいつ、ほんとありえねえんだよ！」
俺は目の前のウーロン茶をぐいとあおり、それからは晴輝への一人愚痴大会となった。
一年の頃の新歓でひっくり返って以来、酒は飲まないようにしているのだ。
しかしなんだか今日はよく口が回る。
やっぱ懐かしい仲間といるからかな。

帰省、そして同窓会　＃５

ウーロン茶を飲みほし、ぐちぐち延々と晴輝の愚痴を言い続ける俺。
女子に囲まれている晴輝をちらりと見やると、いつもの人を小馬鹿にしたような笑みではなく、対女子用の爽やかな笑顔を振りまいていた。
周囲の女子の目が明らかにハートマークになっている。
可哀想に、完全に騙されてしまっている。そいつは目玉焼きを作るときにフライパンに蓋をするのを知らず、異臭騒ぎを起こしてしまうようなずぼらな男だというのに。
あの女子たちも、晴輝のだらりと顔を緩めたようなだらしのない笑い方を見れば、百年の恋も醒めるのではなかろうか。

そんな晴輝にさえイライラしてきた。
愚痴がヒートアップする俺に、ヤスも番長も呆れ顔になる。
俺の頭の中もぐるぐるしてきた。自分でもわけがわからない。

「おい、旬。大丈夫かお前」
「なんか目据わってるけど……」
「んだよ、文句あっか！　アホ！」
「ええー……」

ドン引く二人に構わず、俺は目の前の焼き鳥を次々口へ運んだ。
どんどん空になっていく皿を見て、ヤスがまた呆れ顔をする。

「はい、みなさんご注目ー！」

輪の中心にいる野中がマイクを持って再び立ち上がって言った。
「ただいま、遅れて到着したお嬢さん方がこのふすまの向こうにいらっしゃいます！　はい拍手ー」
ぱらぱらと拍手が起こる中、ふすまがスッと開いた。
きゃあきゃあ言いながら数名の女子がそちらへ駆け寄った。
ふやける意識の中そちらを見やると、俺は思わず口内の食物を噴き出した。
意識が一気に覚醒する。
「うわきったね」
「どしたの、旬……」
二人が何か言っているが無視して、開いたふすまへ駆けだす俺。
「……ていうかコレ、ウーロンハイじゃねえの」
「ああ、だからあんなんなのね……」
二人のその会話は、駆けだした俺の耳に届くことはなかった。
「お嬢さんって……え、あれ男じゃねえの？」
「さあ。でもどっちにしても美人だな」
開いたふすまの前に立つ人物を見て、男子がひそひそそんなことを

話している。
俺はその人物の元へ駆け寄った。
「か、郁さん！　なぜこんなところに……」
多くの不躾な視線を受けたじろいでいた郁さんは、俺を見て驚きつつも、ちょっとほっとしたようだった。
「おお、旬太郎！　また会ったな。実はヤボ用ってこれのことだったんだよ」
「そうだったんですか……」
郁さんは姉妹校の先輩でもあったようだ。
なんという運命。ディスティニーである。
クラスの男子から声が上がる。
「おい、青木！　その人お前の知り合いなん？」
「俺らにも紹介してくれよー」
にやにやと下卑た笑いを顔に貼りつけクラスメイトが寄ってきた。
こんな酔っ払い共を神聖な郁さんに近付けてなるものか！
俺には彼女を守る義務がある！（第十夫人として）
俺は立ちはだかるようにクラスメイトに向かい合った。
「黙れ酔っ払い共！　郁さんに近づいたらぶっとばすぞ！」
「んだとぉ、テメエ調子のってんなよ！」

クラスの男子に胸ぐらをつかまれる。
「お前も酔っ払いじゃん……」というヤスのつぶやきもまた俺の耳には届かない。
「そーよ、あんた調子乗んないでよね！」
「何様なの？」
郁さんの親衛隊（おそらく第二～第九夫人たち）からも野次が飛んでくる。
そうして、宴会場はてんやわんやの騒ぎとなり始めた。
やいやいとはやし立てる男子に、きゃあきゃあ怖いと言いながらもバッチリ楽しそうにしている女子。
男子同士で取っ組み合っていると、後頭部に何かが当たった。
「いててっ」
「うおっ、あぶねっ」
見ると、丸まったおしぼりが後ろに落ちている。どうやら郁さん親衛隊からの攻撃らしい。
お手拭き、割り箸ならまだしも、座布団やらジョッキやらも投げてくるのでタチが悪すぎる。
それらを避けつつも、食器類は割れないようにキャッチせねばならない。
先ほど俺の胸ぐらをつかんでいたクラスメートもたまらず避難していた。
――しかし俺は逃げるわけにはいかんのだ！
「おい、やめろよお前ら！」

そんな攻防戦を見かねたのか、焦った様子の郁さんが親衛隊へセーブをかける。
俺の注意も郁さんへと向く。

「旬！」

晴輝の声がした。
見回すと、少し離れたところに晴輝が座っている。
何か必死に伝えたいようなのだが、女子に囲まれて身動きが取れないらしい。

「なに、聞こえねーよ」
「前向け！　危ないって！」
「前ぇ？」

そして俺が前を向いた瞬間、陶製の灰皿が鈍い音をたて俺の眉間にクリーンヒット、そして視界はそのままブラックアウトした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「うーん……いててて」
「おお、目え覚めたか。よかった」

目をあけると、郁さんが俺の顔を覗き込んでいた。
メガネがないのでおぼろげだが、その向こう天井が見え、どこかに横たわっているとわかった。周りは静かで人気がない。どうやら宴会場ではないようだ。

「えーと、なんでこうなったんでしたっけ」
「ほら、お前さっき灰皿が眉間に当たって……」
「ああ……」

額に当てられた氷が冷えていて気持ちいい。
言われてみれば眉間がズキズキする。……というか全体的に頭が痛いのはなぜだろう。

「ごめんな、俺のせいでこんなことに……」
「そんな、郁さんのせいじゃないっすよ！」

しゅんとする郁さんに俺は焦って両手を振る。

「そうそう、旬が酔ってただけだし」
「そうですよ……って晴輝！？」

頭を反らしてみれば晴輝がいた。
ていうかなんだこの状況は。
頭に敷いているものがほのかに温かいんだけど……これは膝枕？
……。

「っておい！　なんでお前が膝枕してんだよ晴輝！　アホか！」
「いや重いから早くどいてよ」
「言われんでもどくわ！　ボケ！」

がばりと上体を起こす。
その勢いで余計に頭の中でガンガン鐘が鳴り響いた。

――膝枕と言えば男子の憧れといっても過言ではない。

郁さんに膝枕してもらえた日には嬉しさのあまり昇天するだろう。
なのに……。

「なんでお前に膝枕されなきゃなんねえの……」
「や、こういうのって男子の夢かと思って」
「だとしてもお前に叶えられたくねえよ！」

涙目でまくしたてた俺に、郁さんはぷっと噴き出した。

「二人、仲良いんだな。晴輝くんはよくうちの店来てくれてるから知ってたけど、まさか一緒に住んでるなんてな」
「い、いやわざわざ言うことでもないかなと……」

こいつと関わりがあるというのが嫌で言っていなかったのだ。

「お前が寝てる間、晴輝くんといろいろ話してたんだ」
「え、と……いろいろとは」

ちょっと顔を曇らせる郁さん。

「結構前だけど……。お前がお客さんと揉めたときあったろ」
「え」

まさか先日の『土下座騒動』のことか。

「俺、そんな大変なことになってたなんて知らなくて。あの時は助けられなくてごめんな」
「あ、いえ、過ぎたことですし……ハハハ」

なんてこった、あの騒動については郁さんの耳に入っていなかった

ことだけが救いだったというのに。
空笑いしつつ晴輝を見やると、声に出さず「ごめん」と言ってきた。
謝るくらいならもっと申し訳なさそうな顔しやがれってんだ。

「なんかあったらすぐ言えよ。今度はちゃんと助けるから」
「あ、ありがとうございます。でもなんでそんな……気に掛けてくれるんですか？」
郁さんはにかっと笑った。
「俺、旬太郎のこと弟みたいに思ってるからさ」
「弟……」
郁さんには申し訳ないが、俺は内心がっかりだった。
あ、と思い出したように郁さんが言う。
「いや、『第十夫人』として、か？」
再びツボにハマってしまったらしい郁さんがお腹を抱えている。
その発作が治まるのを待ち、俺たちは宴会場に戻ることにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊

宴会場はだいぶ落ち着きを取り戻しており、しばらくの後同窓会は閉会となった。
俺もだいぶクラスメイトに絡まれたが、どうやら俺は酔っ払い扱い

されているらしく強く咎められたりすることはなかった。
酒など飲んだ覚えはないが、気のいいやつらで助かった。

「そいじゃあ、旬、晴やん。またな」
「また来いよ。まあ旬はまた来月くんだよな」
「来月はテストだっつの。お前ら俺に会えなくても寂しがるなよ」
「そっちこそ」

わははと笑いながらヤス、番長と別れた。
やっぱりちょっと寂しくなる。我ながら女々しいな。

「んじゃ俺らも帰るか。旬」
「おう」

そうか、今日は晴輝もいるんだった。
いつも一人で寂しく帰っていたが、こんなやつでもいないよりは全然いい。

駐車場へ向かう途中、晴輝が思い出したように言った。

「そういやお前、さっき白ワンピの女の子から紙もらってたけど、何なのあれ」
「ああ、これか……」

鞄からその厚紙を取り出す。
賞状のような紙には『郁さま夫人★五ヵ条の誓い』と達筆で書かれている。
帰りぎわ、目を釣り上げたままの優美さんから押し付けられたのだ。

「……」
「……お前……」
「いい、何も言うな」
晴輝が半笑いの顔で俺の肩に手を置いた。
腹立つなこんにゃろう。

夜の駐車場は真っ暗だ。
じめじめとした空気が肌にまとわりつく。
「なんかベタベタする……。早く風呂入りてぇなー」
晴輝の呟きには俺も同感だ。
梅雨のせいで湿っぽい空気はどうにも不快である。早くさっぱりしたい。……あ。
「……そういえば、景子のやつ風呂直してないんじゃねえの」
「えっマジで」
伸びの姿勢のまま固まる晴輝。
夏間近とは言え、田舎の夜は冷えるのだ。半袖姿の晴輝を見ていても寒々しいくらいに。
「今日は水風呂決定か……」
温度調節機能の壊れた蛇口をうまく操作するのは、日々その風呂を使っていないと難しい。
がっくりとうなだれて俺たちは車に乗り込んだ。

行きとは違い、荷台でなく助手席に座る。
夜道で荷台に乗るはめにならなくてよかった。いろんな意味で怖そうだし。
座ると自然とあくびが出た。そういえば酒も抜け切っていないと気付く。
運転席に乗る晴輝を見ると、晴輝はしらふのようだ。
行き当たりばったりだったとはいえ、飲み会なのに車の運転なぞさせて少し申し訳なくなる。
「晴輝、悪いな。飲み会なのに酒飲んでないんだろ？」
「うん、まあいいよ。ついてきたの俺だし、それに楽しかったし」
「あ、そう……？」
よくわからないが楽しんでいたらしい。
晴輝は暗闇の中パカッと携帯を開いた。青白い光が晴輝を照らす。
「ほら、今日だけでメアド２０件ゲットしちゃった」
「なんだとっ」
そういうことか。このプレイボーイめ。滅びろ。
「ったく……。お前、郁さんだけには手出すんじゃねえぞ」
「はいはいっと。そんじゃ、車出すぞ」
俺たちを乗せた軽トラは颯爽と夜道を走る。
薄暗くて、まぶたが重力に負けそうになるのをこらえる。
「寝ててもいいぞ」

そんな俺の様子に気づいたのか、晴輝は前を見たままそう言った。

「いや、大丈夫。悪いし」

「旬は変なとこで気いつかうよなあ」

「ほっとけ」

とは言ったものの、まぶたへの重力は徐々に重みを増していく。

気付かないうちに俺は寝てしまったようだ。

夢の中か現実かわからないが、なにかが強く光った気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7633l/

ホームシックシンドローム

2010年10月8日12時38分発行